

ランクでも一般選抜よりも高い割合で落伍する者が多いとしている。

高校調査書成績と推薦入学

推薦入学の実施にあたっては、その選抜に高校調査書成績が重要な資料になる。このため、推薦入学者の高校調査書成績と入学後の成績の関係を分析した報告が見られた。これによると、高校調査書成績の点数が一般入学者のそれよりも劣った生徒を推薦した高等学校があること、

また、推薦入学者の学内成績が一般入学者それよりもきわめて悪い例があることを指摘している。さらに、推薦合格者の高校調査書成績は優秀であるが、入学後の成績は必ずしも良いといえないことを指摘し、推薦入学者の選抜において高校調査書に対する配点比率を下げる必要があるとしている。

共通第1次学力試験成績、第2次学力検査成績を用いて高校調査書評点平均値を更正するなどして高校間格差を検討した報告も見られた。

選抜の諸方式

『選抜の諸方式』という入学者選抜に関する調査・研究テーマに属する問題は多岐にわたる。その中で、面接（個人あるいは集団）試験、小論文および実技試験に関する研究の動向と、受験機会の複数化に直接関係する研究の動向は、それぞれ独立の項目としてとりあげられるので、ここではそれ以外の選抜の諸方式の研究の動向を概観する。とはいえ、昭和62年度からスタートした受験機会の複数化という大きな制度の変更に加え、平成2年度からは共通第1次学力試験に代わる大学入試センター試験の制度が新たにスタートした。また、入学者選抜試験を分離・分割方式で実施する大学がますます増える傾向にある。これらの矢継ぎ早の変化に適切に対応しようとして、各大学ではいろいろの角度から調査・研究を実施している。以下に、主として

2段階選抜、推薦入学、第2次募集などに関連して行われた各大学の入試研究動向について述べる。

2段階選抜

2段階選抜方式、すなわちいわゆる足切り方式は社会一般から批判されているが、この方式を採用することにより、入試の一発勝負的性格をやわらげ、よりキメの細かい選抜が可能であるとして、2段階選抜を積極的に評価している大学もある。しかし、圧倒的多数の大学は、試験場確保、採点能力、入試事務遂行能力などの理由から、いわば必要悪的に2段階選抜方式を採用しているように思われる。昨年に引き続き、2段階選抜がなければ最終的な合否判定で合格

するかも知れない受験生を、2段階選抜で排除することがないようにという意味での適性倍率あるいは安全倍率を理論的に推定する研究が行われた。また、具体的なデータを用いて、2段階選抜は、今までの安全倍率を満たせばよいという発想だけでは不十分で、募集単位間の受験生母集団の性格が極端に違う場合があるから、募集単位ごとにきめ細かく倍率を設定して実施すべきであるとの指摘もあった。いずれにしろ、このような調査・研究の成果を、実際の2段階選抜で活用した大学が多い。

推薦入学

選抜方式として推薦入学制度を採用する大学は引き続き着実に増えており、また近い将来これを導入する前提で推薦入学制度を調査・研究している大学も増えている。推薦入学制度を採用している大学のほとんどが、一般入試で入学した学生との比較調査、さらには卒業後にいたる追跡調査を、推薦入学制度導入以来継続的に行って、データを蓄積している。これらの調査結果は、概ね推薦入学者は一般入学者と同程度、あるいはむしろ良好な成績をあげているなど、推薦入学制度の積極的側面を評価するものが多い。

しかし、いくつかの大学から、推薦入学者は一般入学者に比べて、たとえば大学院に進学する割合が極端に低い、留年率が高い、必ずしも意欲的でない、卒業後の進路選択が大学で学んだ専門と無関係の分野である比率が高い、などの傾向が最近見られるようになったとの指摘がなされている。さらに、高等専門学校などから

の編入学者は一般にきわめて優秀であり、その選抜試験の内容は実質的に推薦入学者選抜とほとんど同じであることを指摘した上で、推薦入学制度を否定的に見るのではなく、そのメリットを強固なものにするために、多角的な検討を開始した大学がある。

しばしば指摘されていることであるが、推薦入学制度を成功させる重要な鍵のひとつは、大学と高等学校との間の信頼関係を確保するということであろう。大学の側には、高等学校が推薦制度を受験対策的に受け取りすぎているのではないかという印象があるが、定員確保などの観点から、大学は推薦入学制度を少し安易に導入しすぎたのではないかという率直な反省を述べた大学もある。

大学と高等学校の間の信頼関係を確保するために、高等学校側と積極的に交流して、推薦入学制度を十分に理解してもらうための努力を傾けた大学が多かった。また大学を高校生やその家族に開放して大学説明会などを開催し、大学自体をよく知ってもらうための努力をしている大学も増えてきている。このような努力は今後もしつそう推進すべきものと思われる。

第2次募集

定員留保や欠員補充の第2次募集を行った大学は今年度も少なくなかった。第2次募集による合格者の入試成績は第1次募集合格者に比べて優れているというのが、受験機会複数化以前の一般的傾向であったが、昨年度と同様に今年度は必ずしもそうではない例が少なくなかった。すなわち、第2次募集の上位合格者の中に入学

辞退者が多く、その結果入学者についてみれば第1次募集入学者に比べて入試成績が必ずしも優れているわけではない。また、第2次募集入学者のその大学に定着する割合が低いと指摘する大学もある。

その他

大学入試センターでは、第2次試験の効果について興味ある研究を行った。すなわち、共通1次試験全受験者を「総合強」、「理系強」、「文

系強」、「総合中」、「総合弱」の5つの集団に分類し、共通1次試験のみによる選抜シミュレーションを行ってその結果得られた合格者の学力特性と、実際の合格者の学力特性を比較することによって第2次試験の効果を論じたものである。その詳細をここで紹介することはできないが、全国的なデータをもっている大学入試センターだからこそできた研究であること、各大学で参考になるであろうと思われる興味のある結果が得られていることを付言しておきたい。

受験者・合格者の属性

受験者・合格者の属性に関する調査・研究は、ほとんどの大学で継続的に実施している。本研究報告書は昭和63年度のものであるが、以下では少なくとも部分的には平成元年度の各大学の調査・研究を含めて概観したい。

受験者（志願者）層および合格者（入学者）層の分析

各大学は、従来継続的に行ってきた調査・研究方法、各種のアンケート調査、追跡調査などの方法を駆使して、受験者などの属性の変化について研究している。具体的な調査・研究項目は多岐にわたるが、受験者・合格者・入学辞退者・入学者の属性の出身地別、出身高校別、現役・浪人別、男女別などに関する調査分析、併

願大学（公立、私立を含む）に関する調査研究、入学者の意識や勉学意欲などに関する調査研究などを詳細に行った大学が多かった。受験機会複数化以前と比べると、志願者と受験者の差および合格者と入学者の差は依然として大きく、昨年度より小さくなる傾向はみられなかった。各種の調査結果の分析から、入学者あるいは現代の若者一般の資質について、その画一性、無気力性、自立性・創造性・積極性などの欠如、などの特徴が明らかに認められるとした大学が少なくないが、このような憂慮すべき現状を打破するために大学で可能な方策は何かを真剣に論じている大学がある。またいくつかの大学で、受験機会複数化の制度の前後の共通第1次学力試験得点変動を統計学的手法を駆使して分析し、いわゆる国立大離れや学力低下の現象に一定の